

# 歌舞伎の 下座音楽は おもむろい

「歌舞伎のオーケストラ」下座音楽の魅力を探る



日本伝統音楽の魅力を探る  
レクチャーコンサート Vol.4



日時 平成20年 8月 19日(火) 午後6時30分開演  
(開場午後6時)

会場 府民ホールアルティ

主催 京都和文華の会  
共催 真如苑  
協力 立命館大学アート・リサーチセンター  
社団法人 京都デザイン協会  
NPO法人 京都文化企画室  
NPO法人 檜の会

本日はご来場いただきありがとうございます。

「京都和文華の会」は日本の伝統文化に様々な形でアプローチし、多くの方々にその良さを伝えていければと、伝統文化と京都が好きで有志が集まり、2005年秋に任意団体として発足いたしました。

その最初の試みとして日本の文化を構成する柱の一つである伝統音楽を取り上げ、特に次代を担う方々にその良さを知っていただくプログラムを実施したいと考えておりましたが、主旨にご賛同いただいた共催者でもある真如苑の社会貢献事業として位置づけていただき「日本の伝統音楽の魅力を探る レクチャーコンサート」のシリーズを始めました。

第1回の「地歌」、昨年5月の「謡曲」、11月に開催の「琵琶楽」とも好評で、「伝統音楽がこんなにも面白かったのか」と、多くのお声をいただいております。

第4回目の今回は、少し趣を変えて人気があり代表的な伝統芸能である「歌舞伎」から、それを支える「歌舞伎のオーケストラ」とも言われる下座音楽を取り上げました。構成・解説は立命館大学アート・リサーチセンターの赤間亮先生に担当をいただき、永年の蓄積を生かして聴き見せる舞台を作ってくださいます。ご出演者には関西を地盤に活躍されている斯界の第一級の方々をお迎えすることができ、また願ってもない事に中村壱太郎さんに特別にご出演いただくことになりました。

これも本日も来場の皆様はじめ、関係いただいている皆様のご支援、ご協力の賜物と感謝いたします。

この催しが、伝統音楽の魅力を皆様方にお伝えすることができ、その伝承に少しでもお役にたてることができればと念願しております。

それでは間もなく開演です。どうぞ、最後までゆっくりとお楽しみください。

## 挨拶 GREETING

京都和文華の会  
代表 早川 聞多

プログラム  
PROGRAM

- 1 総合解説
- 2 楽器の説明
- 3 大太鼓の演奏
- 休憩
- 4 曲の演奏
- 5 歌舞伎舞踊組曲

---

特別出演

中村壱太郎

演奏

中村寿慶（鳴物・コーディネーター）

藤舎悦芳（鳴物）

藤舎華生（笛方）

杵屋浩基（三味線）

今藤敏行（三味線）

構成解説

赤間 亮（立命館大学教授）

司会

南端玲子

## 歌舞伎の下座音楽

下座音楽は、歌舞伎が上演されるにあたって、演奏される音楽の内、語り物である浄瑠璃以外の囃子方の担当する音楽の総称であり、基本的に下手の黒御簾の内で演奏されるものである。いわば音楽劇である歌舞伎のオーケストラにあたる。舞台上に姿を現わし雛壇の上に座って演奏するのは、「出囃子」と呼び、特殊な形式である。

## 解説

### 歌舞伎の

下座音楽はおもしろい

赤間 亮

歌舞伎は、お国の歌舞伎踊りより始まったとされている。そのバックで音楽を奏でる役割を担ったのが「囃子方」であり、歌舞伎以前の芸能である能楽を摸しているため、笛、大鼓、小鼓、太鼓（四拍子という）が楽器として使われていた。歌舞伎の音楽が能とはつきりと区別できるよくなる切っ掛けは、遊女歌舞伎時



寛政6年(1794)1月江戸河原崎座  
早大演劇博物館118-0091



文化14年(1817)3月「芝居大繁昌之図」 早大演劇博物館118-0001,0002



代における三味線の導入であった。軽快な音を奏でる三味線が取込まれ、その有無がその後の芸能の性格を決定づけたと言ってよい。

### ・下座の位置

さて、囃子方の演奏場所は、初期歌舞伎では、いわば隠れる場所がなく、観客席から見える正面奥に並んで座っていた。おそらくは1740年前後の時代に、舞台装置が発達するに従い、正面での演奏が邪魔になって陰に隠れるようになっていったらしい。この時期、人形浄瑠璃の

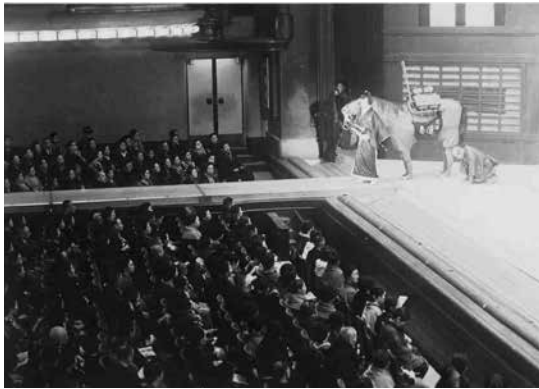


安政6年(1859)「御狂言楽屋本説」  
立命館大学ARC所蔵

全盛期において人気を奪われた歌舞伎が様々な工夫や改革をしていた大坂の歌舞伎界において、舞台機構の様々改良をする中で、その位置の移動がおきたと予想できる。そして、上方に従って江戸でも舞台向かって右手(上手)の出入り口の脇に移ったようである。

「下座」とはこのように舞台の中央ではなく、脇の下がったところにあるところから出た呼称のようで、この時代から「囃子方」とも「下座」とも呼ぶようになっていく。現在、「下座音楽」と音楽総体に対する呼称するのは、「下座の音楽」を縮めたものが一般に定着したもので新しい用語であり、幕内ではこの言葉は使わず、通常「囃子方」「お囃子」と呼んでいる。

丁度この舞台上手に移った時期には、江戸において舞踊の大流行とともに、長唄の急速な進歩が遂げられている。舞踊劇における浄瑠璃の演奏は、逆に「出語り」と呼ばれる形式をとるようになり、囃子方の演奏も

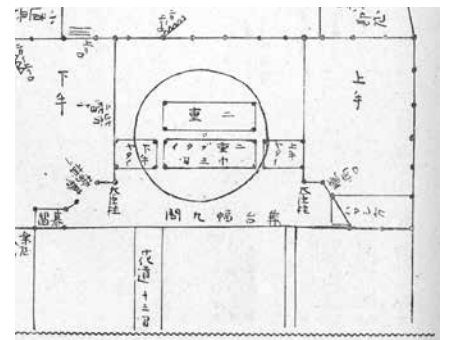


昭和13年3月大阪歌舞伎座「三千両黄金蔵入」の舞台 立命館大学ARC所蔵

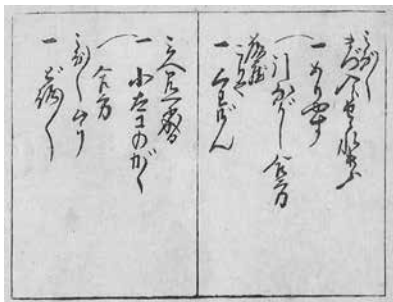
かに、上手  
臆病口の脇  
に囃子方の  
座があり、  
さらに下っ  
て、明治四  
十年代頃ま  
では、やは  
り上手の出  
入り口の脇  
に仕切り格  
子を立てて  
演奏してい

の「黒御簾」の内に移るのは、文化終  
り頃（1817）の錦絵に上手下手  
両側に囃子方が位置するものがある  
ため、このころから下手側に移り始  
め、天保の改革による猿若町への移  
転とともに下手へ定着したもののよ  
うである。一方、上方では、文政二年  
の南座の劇場図面（「演芸画報」大正  
15年1月 伊原青々園紹介）で明ら

下座の外、  
つまりは舞  
台上で演奏  
する場合に  
「出囃子」と  
呼ぶことに  
なるのであ  
る。



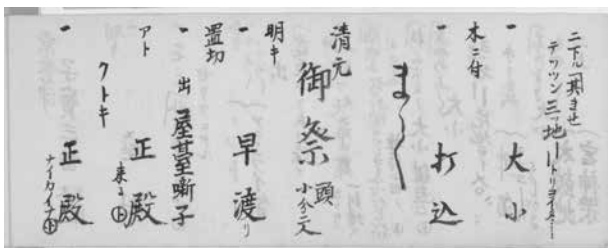
文政2年(1819) 南座舞台図



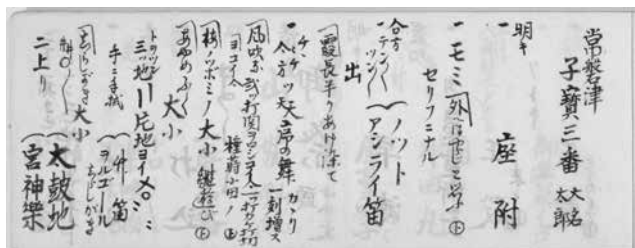
享和3年(1803)「絵本戯場年中鑑」の内「附帳」  
立命館大学ARC所蔵

修行が必要であ  
ることもこの曲  
目数から理解で  
きる。作品に曲  
を付けていく作  
業は、作品その  
ものの出来不出  
来に大きな影響  
を及ぼすため、  
いわば現在の演

たという。おそらく、松竹による歌  
舞伎興行の全国規模の統合があり、  
大正期以降、江戸式の下手黒御簾内  
という形が定着したものであろう。  
・下座の曲目と附帳  
1800年前後に出版された演劇  
書には、すでに数多くの囃子の曲目  
の説明がある。これらに上げられた  
曲目は、その名称が現在と違ってい  
る場合ものもあり、同じ名称でも、  
内容が現在と異なる場合もあるが、  
約300種類が記録されている。現在に  
残る曲目は、800曲を越えると言われ  
おり、ほぼ明治期までに定着したよ  
うである。遡れば、元禄時代の粗筋  
本である「絵入狂言本」にも「天王立  
ち」など、現在も使われる曲名が記  
されているが、長い歳月をかけて、  
次第に、曲目数を増やし、歌舞伎の  
演出に厚みを加えてきたのである。  
現在、これらを覚えるために相当な



明治期の附帳



白樺文庫蔵

れることは少な  
い。その理由は、  
この附帳が存在し  
ているからで、演  
奏のキツカケと曲  
目、強弱を表現す  
る用語が、きめ細  
かく書込まれてい  
る。

出家以上に、芝居をよく理解してい  
る必要がある。この音楽の演出プラ  
ンナーを「付師」  
といい、歌舞伎上  
演にとって重要な  
役割を担ってい  
る。  
囃子の演出プラ  
ンつまり、囃子の  
台本を「附帳」と  
いう。歌舞伎の全  
体の台本には、ト  
書きや舞台書きが  
あって、そこにも  
囃子の指示が書か  
れている場合があ  
るが、特別な場合  
を除いて、書込ま  
れることは少な  
い。その理由は、  
この附帳が存在し  
ているからで、演  
奏のキツカケと曲  
目、強弱を表現す  
る用語が、きめ細  
かく書込まれてい  
る。

(参考)  
景山正隆「歌舞伎音楽の研究」  
(1992年)

### 〈下座音楽の使われる場所〉

- 1、幕明き
- 2、人物の出・入り
- 3、人物の居直り
- 4、人物のせりふ
- 5、人物のしぐさ
- 6、人物の思入れ
- 7、見得
- 8、立回り
- 9、特定の場面  
くり上げ、殺し、髪梳、物着  
色模様、濡れ場、縁切り  
せり上げ、せり下げ、押し戻し  
宙乗り、だんまり
- 10、場面転換 とくに回舞台
- 11、幕切れ
- 12、幕外

### 〈楽器〉

- ・弦楽器 三味線
- ・打楽器 小鼓、大鼓、太鼓、大太鼓
- ・管楽器 能管、篠笛
- ・補助的楽器 大拍子、双盤、当り鉦、本釣り、半鐘、鈴、銅鑼、チャップパ、オルゴール、など
- ・雑楽器 木魚、木琴、駄路、拍子木、四つ竹、びんざさら、チャルメラ、琴、尺八、羯鼓、など

### 〈太鼓の効果音〉

通り神楽、雨音、水音、浪音、さざ波、滝の音、雪音、雪おろし、雪崩、やまおろし、雷、ドロドロ、大ドロ、薄ドロ、時の太鼓、三つ太鼓、角力太鼓、神輿太鼓、など  
 (※演奏はこの中から一部)

### 〈演奏曲〉

#### ○セリの合方

三味線・太鼓・大太鼓・能管・その他  
 時代物で、せり上げ、せり出しの時に使う。長唄の一節をとったものと、特に作曲したものがある。実際にはセリを使っているなくてもセリを想定している場面でも演奏されることもある。「五山桐」の山門、「先代萩」の床下、「五郎」、など。

#### ○助六の前弾き

歌舞伎では、かつて人物の登場時に、その性格を表現するのに、囃子を伴って一振り踊ってみせる場合が多かった。現在でも、花道で一旦止まり、名乗りの台詞や所作をしてから本舞台に移ることが多いが、その時に囃子が必要とする。歌舞伎十八番の「助六」の助六の出は、河東節に

よるものであるが、この出端の芸が残った古風な形である。今回は、長唄の「助六」の出の前弾きを演奏する。

#### ○立回りの合方

殺し、捕り物、喧嘩などの場面は、歌舞伎では様式的に演じられ、決った型や見得を組合せて、動きを舞踊のようにし、美しさを強調する。下座だけでなく、ツケが用いられる。

#### ・ドンタツポ

小鼓・篠笛・三味線・大太鼓  
 時代物の立回り。「在原系図」(蘭平物狂い)、「双巴級」の五右衛門の捕物の場面など。

#### ○入りの鳴り物(幕外)

#### ・飛び六法

能管、太鼓・大太鼓  
 幕外での六法を踏む引つ込みの鳴り物。六法とは、両足を同じ側の手を出しながら、交互に踏んで飛ぶように駆け込む荒々しい演技である。「菅原」の梅王丸、「勧進帳」の弁慶など。

## 解説

〈歌舞伎舞踊組曲〉

・次第 大鼓・小鼓・能管

能で最初の登場人物で独唱、地謡が繰り返す形式を、能から取材した曲の場合に長唄が継承したもの。勧進帳の「旅の衣はずかけの」の部分など。

・「元禄花見踊」から（前弾き）

原曲は、1878年、東京で新富座が新築された時に、その大切で初演された。上野の山の花見の景で、湯女、武士、若衆、などが登場する元禄風俗をうつつした内容で、最後は元禄歌舞伎風に総踊りとなる。

・「吉原雀」から（踊り地）

1768年11月市村座初演。本外題は「教草吉原雀」。長唄の人気曲の一つ。鳥売の夫婦が吉原の色模様を語る内容で、前半の踊り地の部分を今回は演奏では組み込んでいる。

・狸々

1874年7月河原崎座が新築開場したときに初演。本外題は「寿二人狸々」。能の「狸々」から取材した作品で、松羽目物の一つ。狸々が二人出て相舞になる。

・勧進帳

1840年3月河原崎座初演。七代目市川團十郎が歌舞伎十八

番の一つとして初演した。能の「安宅」から取入れた作品で、現代においても最も人気のある演目。

冒頭の次第、勧進帳の読み上げ、富樫と弁慶の山伏問答、折檻、義経弁慶のしんみりとした情愛、弁慶の延年の舞、幕外の飛び六法の引っ込みなど、多くの見どころと、とくに長唄の優れた曲調で観客を魅了する。

〈儀式的囃子〉

囃子方の役割は、演目中での音楽の演奏だけでなく、公演全体に必要な鳴り物も担当している。すなわち、芝居が上演されることを伝える櫓太鼓や一番太鼓、打ち出しなどの儀式・儀礼的な演奏もある。今回は、

公演の前後に次のもの演奏していた。  
 だく。

・着到 能管、太鼓、大太鼓

開幕30分ほど前に打つ囃子。「お多福来い来い、お多福来い来い」と打っている。

・打ち出し 大太鼓・拍子木

一日の公演の終演を知らせる囃子で、大太鼓による独奏で、狂言方による拍子木も被せる。最初、激しく、だんだんゆっくりになり「出てけ、出てけ」と打つ。別名「追い出し」とも。最後に太鼓の縁をカタカタカタと打つのは、劇場入り口の木戸（鼠木戸）を閉めて、鍵を掛ける音を摸したものである。

（赤間 亮）



明治35年(1902)組上絵に描かれた囃子方 国立音楽大学所蔵

演奏



鳴物  
中村 寿慶 (なかもら しゅけい)

昭和48年 京都にて中村流三世家元 中村寿鶴の長男として生れる。幼少の頃より父に手ほどきを受ける。  
昭和62年 父の伯母である藤舎流宗家 藤舎せい子師に入門。  
平成3年 プロの邦楽演奏家として各公演に出演。  
平成12年 父の前名である中村寿慶の名を二代目として襲名。  
現在、歌舞伎、日舞、各邦楽演奏会に多数出演。また、大藏流狂言の茂山家との新作狂言やドイツのカンマーフィルハーモニー・ブレイメンとのコラボレーション等、クラシック音楽にも意欲的に活動中。



鳴物  
藤舎 悦芳 (とうしゃ えつほう)

昭和47年 佐賀県伊万里市に生まれる。歌舞伎囃子において活躍する囃子方の田中伝兵衛、田中勘四郎、田中長十郎は伯父にあたる。  
昭和63年 中学卒業と同時に上京し、3人の伯父の元、五年間の研鑽を重ね歌舞伎座にて初舞台を踏む。以来、歌舞伎公演に多数出演。  
平成5年 京都に於いて藤舎呂悦師に師事し、平成6年、藤舎悦芳の名を許される。  
平成8年 ハンガリー建国一〇〇年祭、オーストリア建国一〇〇〇年祭に出演し、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団と共演。国内においても、各地の様々な演奏会をはじめ、日本舞踊会に多数出演など、国内外で活躍中。



笛方  
藤舎 華生 (とうしゃ かしよう)

立命館大学文学部卒業。邦楽部在籍中に琴古流尺八を学ぶ傍ら、篠笛の研究・演奏を始め、2世藤舎名生に師事。平成4年、華生の名を許され、本格的な演奏活動に入る。京都南座・大阪松竹座など、松竹大歌舞伎に出演のほか、文楽中南米公演や多くの舞踊公演などに出演し、主に関西を中心に活動している。



三味線  
杵屋 浩基 (きねや ひろき)

立命館大学卒業。  
長唄三味線方。(財)杵勝会所属。  
長唄三味線を杵屋寿浩師に師事。囃子・小鼓を藤舎呂悦師に師事。杵勝会、東成会等の長唄演奏会に出演。平成15年チエコ共和国プラハにて演奏。国内・歌舞伎公演、日本舞踊公演に参加。杵屋勝寿治師、杵屋寿浩師と共にリサイタル「三代の会」を開催。  
NHK-FM、TVに出演。  
現代邦楽・古典邦楽演奏団体「関西室内邦楽」会員。立命館中学校にて三味線を教授。京都市事業・京都「創生座」プロジェクトチーム。現在、関西を中心に活動中。



三味線  
今藤 敏之 (いまふし としゆき)

平成5年長唄三味線を今藤 佐敏郎氏に師事。家元から今藤 敏之の名を許され名取りになる。以後、市川 猿之助、坂田 藤十郎、松本 幸四郎、市川 染 五郎、市川 亀次郎などの歌舞伎公演、日本舞踊の会、NHK「芸能花舞台」などに出演。他に津軽三味線、日本民謡なども手がけており幅広い三味線音楽をいかして学校などで講習を開くなどしている。





初代 中村 彦太郎 (なかむら かずたろう)

屋号 成駒屋。定紋 寒雀の中に雫。

中村 翫雀の長男。祖父は坂田藤十郎。母は吾妻流家元の吾妻徳弥。平成7年1月大阪・中座五代目中村翫雀・三代目中村扇雀襲名披露興行『姫山姥』の一子公時で初代中村彦太郎を名のり初舞台。平成13年9月新橋演舞場『鏡獅子』の胡蝶を踊る。

平成14年11月国立劇場『仮名手本忠臣蔵』十一段目討入の茶道春齋。平成15年夏比叡山新歌舞伎で『橋弁慶』の牛若丸。平成17年夏比叡山新歌舞伎で『連獅子』の狂言師左近後に子獅子の精。同年10月歌舞伎座『心中天網島―河庄』丁稚三五郎。平成18年1月歌舞伎座坂田藤十郎襲名披露公演『伽羅先代萩』澄の江。同年7月松竹座藤十郎襲名披露公演『連獅子』狂言師左近後に仔獅子の精。同年8月国立劇場大劇場二世藤間勘祖十七回忌追善藤間会にて『土蜘蛛』源頼光。平成19年5月『近松座歌舞伎公演No.18』に『鏡獅子』小姓弥生後に獅子の精。同年7月松竹座『橋弁慶』牛若丸『身替座禪』侍女千枝『女殺油地獄』妹おかち。同年10月歌舞伎座『牡丹燈籠』女中お竹・酌婦お梅。平成20年3月歌舞伎座坂田藤十郎喜寿記念『京鹿子娘道成寺』の所化。同4月松竹座『妹背山婦女庭訓』入鹿妹橘姫『双蝶々曲輪日記』藤屋吾妻『於染久松色説販』髪結亀吉。平成20年7月比叡山新歌舞伎に『藤戸』浜の女おうら、など。



立命館大学教授

赤間 亮 (あかま りょう)

北海道出身。

早稲田大学文学大学院にて歌舞伎史を専攻し、演劇博物館助手を務めたあと、平成3年から立命館大学文学部で近世文学や古典芸能などの講義を担当。歌舞伎出版物の研究を専門にし、現在は役者絵の研究にも力を入れている。

同アート・リサーチセンターでの映像や資料のデジタルアーカイブ研究によっても知られている。

# 上演の記録

会場、主催者などは今回と同じ

## 第1回（地歌）

### ○タイトル

日本伝統音楽の魅力を探る  
レクチャーコンサートVOL.1  
「地歌はおもしろい」

### ○開催日時

平成18年5月18日（火） 午後6時半

### ○出演

演奏

菊原光治氏

助演 菊央雄司氏 菊萌文子氏

構成・解説

久保田敏子氏（京都市立芸術大学教授）

総合司会

笠谷和比古氏（国際日本文化研究センター教授）

## 第2回（謡曲）

### ○タイトル

日本伝統音楽の魅力を探る  
レクチャーコンサートVOL.2  
「謡曲はおもしろい」

### ○開催日時

平成19年5月10日（木） 午後6時半

### ○出演

演奏

金剛流 金剛永謹氏

（助吟）豊島晃嗣氏 宇高竜成氏

観世流 井上裕久氏

（助吟）吉浪寿晃氏 浦部幸裕氏

構成・解説

権堂芳一氏（演劇評論家）

司会

南端玲子氏

## 第3回（琵琶楽）

### ○タイトル

日本伝統音楽の魅力を探る  
レクチャーコンサートVOL.3  
「琵琶楽はおもしろい」

### ○開催日時

平成19年11月29日（木） 午後6時半

### ○出演

演奏

永田法順氏（日向盲僧琵琶、浄満寺住職、宮崎県無形文化財）

田中旭泉氏（筑前琵琶日本橋会）

須田誠舟氏（薩摩琵琶正派 日本琵琶楽協会理事長）

構成解説

山川直治氏（国立劇場調査養成部主席芸能調査役）

司会

南端玲子氏

### 〈京都和文華の会について〉

京都を基盤とする日本の伝統文化を広く紹介し、その振興と発展を図ることを目的として設立された任意団体で、京都の文化が好きな学者、伝統工芸関係者、会社員等で構成されています。

本会は、広く市民を対象にして、京都を基盤とする日本の伝統文化を紹介する場を設け、その情報を発信することにより、わが国固有の文化に対する理解を深め、伝統文化の振興と発展を図り、もって世界の多様な文化を受容できる精神的な土壌の育成に努めることを目的として、次の活動、事業を行っていきます。

- ・京都の文化にかかわる芸術、芸能、学術、生活文化等の振興を図る活動
- ・若い人たちに日本の文化を伝える活動
- ・伝統芸術、芸能の普及振興のための事業
- ・日本文化伝承のための事業
- ・その他、本会の目的を達成するための事業

### 京都和文華の会

〒611—0033

宇治市大久保町上ノ山51—35

TEL/FAX 0774—43—7577

---

主催協力	京都和文華の会 真如苑 立命館大学アート・リサーチセンター 社団法人 京都デザイン協会 NPO法人 京都文化企画室 NPO法人 檜の会
------	--

---

特別出演	中村吉太郎
演奏	中村寿慶 (鳴物・コーディネーター) 藤舎悦芳 (鳴物) 藤舎華生 (笛方) 杵屋浩基 (三味線) 今藤敏行 (三味線)
構成解説	赤間 亮 (立命館大学教授)
司会	南端玲子

---

舞台監督 照明 音響 大道具	吉田雅敏 ((財)京都文化財団・府民ホール) 北西洋之 ((財)京都文化財団・府民ホール) 鈴木英嗣 ((財)京都文化財団・府民ホール) (株)京都舞台美術製作所
-------------------------	--

---

映像記録 写真記録	立命館大学アート・リサーチセンター 武士真二 秦 晴夫 (NPO法人 京都文化企画室)
--------------	---

---

企画制作	京都和文華の会
------	---------

